県立小千谷高等学校
三学年だより
令和5(2023)年7月4日発行
No.05　推薦入試特集号

学校推薦型選抜について

本日の進学ガイダンスで説明のあった学校推薦型の入試制度について補足します。
「学校推薦型選抜」は一般選抜に次ぐ規模の選抜方式で，一般選抜との一番大きな違いは「出身高校長の推薦を受けないと出願できない」という点です。出願にあたっては，「調査書の学習成績の状況4.0以上」といった出願条件が設定されている場合もあり，条件を満たした人が出願できる入試制度です。

指定校制と公募制の２種類

「指定校推薦」と「公募制推薦」の２種類あり，校内選考が必要です。特に，指定校推薦は，出願条件を満たしていれば，ほぼ合格が確実となりますので，利用する場合，本当に自分の行きたい学校（第一志望校）なのかどうか，保護者等・担任と十分相談してから決定してください。なお，どちらの推薦も学校側が指定する人数以上の希望者があった場合に選考になるのはもちろんですが，指定人数内であっても条件を満たす者かどうかの選考を行いますので，承知しておいてください。

指定校推薦について

①指定校推薦とは，大学・短大・専門学校等が指定した高校の生徒だけが出願・受験可能で，校長の推薦が必要となる入試です。大学等側は，本校の伝統や本校卒業生の実績を評価し，指定校枠を設けています。したがって，指定校枠で推薦される生徒は，本校の代表として受験するのであり，人物・成績ともに優秀な者（谷高での学校生活全般が推薦に値する者）のみが受験可能となります。
②指定校推薦は，実施する学校側と送り出す高校側の信頼関係で成り立っています。したがって，合格した場合，必ず入学することが出願する際の条件となります。（入学辞退はできません）
③今年度に本校を指定校としている大学・短大・専門学校の一覧を，８月下旬に掲示します。
指定校で留意すべきは，一般入試等で本校の生徒が入学した実績もないのに本校を指定校とする学校が，中にはあるということです。したがって，指定校リストに上がっているからといって，その学校の中身（教育内容や就職実績）が保証されるものではありません。自分が考えている第一志望校がリストの中にあるかどうかで指定校推薦を考えるべきで，今まで意識もしなかったような学校をリストから選ぶのは，不本意入学につながりかねず大変危険です。

公募制推薦について

募集要項に，「当該学校長が推薦できる人員は，１校につき〇人とします」と書いてある場合があります。これを「枠あり公募制推薦」といいます。（例えば，新潟大ー医ー保健〔放射線技術科学〕の推薦では，「１校につき１人まで」という指定をしています。）
枠あり公募制推薦は，個人ではなく学校を通して出願します。指定校推薦と同様，校内選考に合格する必要があります。申込方法・校内選考後の手続きは指定校推薦と同様ですが，指定校推薦とは異なり，校内選考を通過して受験しても必ず合格できるわけではありませんので，注意してください。また，枠

なしの場合でも，条件を満たす者かどうかの選考を行います。

【補足】国立大は公募制推薦で行われ，指定校推薦はありません。一方，公立大は一部で指定校推薦を実施しているほか，「県内・市内の高校生に限る」というように出身地を指定する場合もあります。

本校の推薦入試合格者の心得　※詳しくは本日配付の別紙を参照のこと。

合格内定後，別紙の注意事項に反し，成績及び生活態度が悪化した場合は，合格内定取り消しを本校学校長から相手学校側に申し出ることもあります。それだけ入学に至るまで責任が伴うということです。（もっと言えば，入学後も追跡されており，その評価によっては指定校を打ち切られてしまう場合もあります。後輩に対する責任は重大です。）

推薦入試の一般的な心得　（公募制推薦に絞って）

「推薦入試」は一般入試に次ぐ規模の選抜方式で，大学では全体の９割以上の学校が実施しています。推薦入試で大学に入学した人は，国公立大学では１９％ですが，私立大学では４２％となっています。私立大においては，一般入試と並ぶ規模の入試といえるでしょう。一方，国公立大学ではやや状況が異なります。国公立大は募集人員が一般入試に比べて少なく，出願条件のうち成績基準も「評定平均値4.0以上」など厳しくなっています。以下は本校の最近2年間の推薦入試の合否結果です。

国公立大　2022年度卒業生　１３名受験→８名合格　合格率６２％
不合格者５名→国公立大一般入試合格者０名
※推薦入試不合格後の　合格率０％
2021年度卒業生　１３名受験→９名合格　合格率６９％
不合格者４名→国公立大一般入試合格者１名
※推薦入試不合格後の　合格率２５％

私立大（指定校推薦は除く）
2022年度卒業生　１３名受験→　８名合格　合格率６２％
2021年度卒業生　１０名受験→　７名合格　合格率７０％

私立大の場合は，一般入試前に受験機会を増やすという意味では積極的に挑戦してもいいのではないかと思います。

一方，国公立大の場合，推薦入試に合格するためには，学校の成績（５段階評定）が高いことに加え，小論文や面接，口頭試問で高得点が取れることが求められます。（これは私大の推薦でも同様ですが）さらに，共通テストを課す推薦入試では，一般入試と同様に共通テストで高得点を取れるよう対策をしなくてはなりません。出願から合格発表までの期間は，多くの学校で11月～12月（共通テストを課す場合は2月まで）になっており，受験生としては，もっとも勉強に集中しなければならない時に，合否結果を気にしながら過ごすことになります。不合格になった場合は，心理的ダメージだけでなく，実質的学習量の不足で，一般入試に悪影響を与えている例も相当数あるので，推薦入試については保護者等・担任ともよく相談し，慎重に考えてください。安易な考えで受験してしまい，推薦・一般試験の両方とも失敗することは回避しなければなりません。国公立の推薦を考える場合は，自分の第一志望校・学部が推薦入試を行っており，かつ，評定等の基準が自分の成績と合致しており，さらに，推薦・一般の両方を受けてでも何とかして入学したいと強く希望する大学である，という条件がそろったときにチャレンジしてほしいと思います。